

カトリック 仙台教区報

No.240 2020年4月12日
発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任 広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>

主は、まことに復活された アレルヤ!

ご復活おめでとうございます

灰の水曜日から四旬節に始まり、聖週間を経て、今、ご復活祭をむかえました。主のご復活おめでとうございます。

毎年のことで、何の不思議も感じておられない方もいらっしゃるかもしれません。ある意味で、クリスマスは主イエス・キリストのご誕生を祝う日で、わたしたちには分かりやすい、親しみ深い祝日です。誕生はわたしたちも体験から知っています。しかし、ご復活はそうではなさそうです。復活は信じること、信仰を持って受け入れることだからです。

復活は、よみがえりではなく、死を通してしか来ません。復活が先にあるのではなく、死ぬことが先ずあるのです。死ということがどんなことか言葉としてはわかるのですが、そして“死に帰る”という言葉も時々聞きますが、“復活した”ということが、よくわからない。聖書にも、空の墓という表現があり、それだけです。主が復活した瞬間の描写は描かれず、時間的に後になって、マグダラのマリアには園丁としか見えない姿で現れる、という状態です。それでもわたしたちは信じ、歌います。主は復活された、アレルヤ! と。死の向こうにある復活を信じ、希望し、それによって生きているからです。

去年のお正月に、一年間の希望として、仙台教区内の全小教区を回り、皆さまにお会いしたいと申しました。しかし体調を崩し、入院などの予期せぬ出来事があったため、大きな教会にしかうかがえなかったのが残念です。皆さま、すみませんでした。そのために、わたしの体調を心配してくださる方もおられますが、運動面では大分よくなっております。車の運転も今ではできますし、用事があるときには教区事務所に車で出勤しておりますのでご安心ください。

今わたしが一番願っていることは「一つになる」

ということです。常に、司祭、信徒が一つになるにはどうしたらよいでしょうか。それには祈りです。4県あるこの教区を「一つにしてください」という祈りです。



もう昨年になりますが、フランシスコ教皇様が日本を訪問してくださいました。教皇様にお目にかかり、第一に強く感じたことは、教皇職は激務だということでした。日本訪問の直前はタイをご訪問でした。タイから直接日本へ来られました。休む暇もありません。飛行機の中でもジャーナリストたちから説明を求められ、答えれば記事になる、ということをつくづく感じました。それにしてもタフなお方です。でもその奥に弱さも見え隠れしています。ご健康を祈らずにはいられません。

ここで、「教皇様の来日の折、司教様たちは同じ行動をなさっていたのですか」と時々尋ねられます。多分、東京でのことは映像でお分かりになっているでしょうから、長崎、広島のことを聞かれたのだと思いますので、ざっと思い出してみよう。

わたしたち司教団は、11月23日(土)、夜、東京・羽田にお着きになった教皇様を教皇庁大使館でお迎えし、羽田におむかえに出向いた司教方が着いたとき一緒に司教団として歓迎の言葉を申し上げました。教皇様は「私は宣教する巡礼者として日本にきました。日本の教会は殉教者と潜伏キリシタンたちの信仰を土台とした教会です。」と励ましの言葉をくださいました。(多分、そのようにおっしゃったと思う。訪問中、スペイン語が全然わからないことを悔やみました。)

翌24日(日)、教皇様は数人の司教様方と共に、早朝、特別機で羽田空港から長崎に発たれましたが、わたしたち他の司教たちは長崎空港にお昼前に着き、教皇ミサの会場へ着きました。朝から雨降り、参加者の皆さんは雨合羽を着て、雨に濡れながら爆心地公園と西坂の26聖人祈念碑前での行事に参列なさっていたのですが、教皇ミサのときには、不思議なことにきれいな青空が広がり、そのもとでの教皇ミサは印象的でした。この日は「王であるキリストの祭日」でした。教皇様は善い盗賊と言われている人の願い「イエスよ、あなたのみ国においでになるときは、わたしを思い出してください」という言葉が、この地上でイエスがお聞きになった最後の言葉で、イエスがおっしゃった最後の言葉は、「はっきり言うておくが、今日あなたはわたしと一緒に樂園にいる」でした。あの盗賊がイエスを王と宣言し、イエスが救いを約束されました。これらの言葉がこの地上での最後のお言葉だったということにわたしも気づき、新鮮な気づきでした。

その後、教皇様と広島、長崎、大阪、京都の司教様方は「平和の集い」のため広島へ飛行機で飛び立たれ、わたしたちは東京へ戻りました。

25日(月)は、「被災者との集い」です。菊地大司教とわたしは、地下の駐車場で教皇様を迎えました。教皇様はSPとガードマンに囲まれて到着され、私たちとエレベーターで3階の会場に

向かいました。ここでわたしの心に響いた教皇の言葉は「三重災害後の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心を、あたかも一つであるかのように一致させなければなりません」とおっしゃったことです。

この集いの終わり頃、仙台教区から会津塗りのカリスを教皇様へ差し上げました。この時、2言、3言、教皇様にお話するつもりだったのですが、緊張のあまり言葉が出なかったのが残念です。

その後、教皇様は天皇陛下にお目にかかり、東京カテドラルでの青年の集いに出られ、東京ドームでのミサでした。わたしたちも、青年の集いの後、バスで東京ドームに向かいました。

午後4時の東京ドームのミサでは、教皇様は、トヨタ自動車が特別に水素ガスで走るパワムービー(教皇専用車)を提供してくださったので、その車に乗られ、場内を回られたのが、とても印象的でした。そのとき、小さい子どもたちを、抱きかかえられ、接吻したり、祝福なさいました。

最終日、教皇様はイエズス会の司祭たちとの出会いがありました。司教たちは、バスで羽田空港に行き、タラップの下まで行って、感謝を申し上げ、お別れの挨拶をし、バチカンにお帰りになる教皇様をお見送りしました。

今回の教皇訪日を通じて、いつも感じたことは、教皇様のお言葉とさりげない動作からかもしだされる人間的な温かさでした。それと、教皇フランシスコがたびたびおっしゃった言葉、「信頼」「連帯」「希望」「平和」「一つになる」「いのち」これらのことを大切にしながら生きていくとき、皆さんとご一緒に、仙台教区が「一つになる」ということを考えていくということが具体化するのではないかと考えています。

この点は、皆さんもご一緒に考えていただきたいことです。お願いいたします。

【平賀 徹夫 司教 退任のお知らせ】** 次号に「司教さま ありがとう」を特集予定 **

3月18日(水)、フランシスコ教皇は平賀司教の退任願いを受理され、引退が正式に発表されました。仙台教区の教区管理者として、小松史朗神父が任命されました。

【司祭評議会報告】

3月の司祭評議会は、司祭評と教区司祭団の合同役員会として開催された。

はじめに全国的に緊急の対応を迫られている新型コロナウイルスへの仙台教区の今後の対応策を検討し、教区と他教区の現状分析のうえ、3月2日から20日まですべてのミサ等の集会を行わないことを3月末まで継続すると決定した。4月には聖週間があるが、4月以降のことは今後の状況を見ながら再度判断する。

次に、司祭評議会は宣教のかなめとなる信徒養成と教会共

同体づくりをどのように進めるかを大きな課題としているが、これについて3月に行われた地区別司祭の集いで報告があった。今回は新型コロナウイルスの話題に多くの時間が使われたため次回以降に話し合いを継続する。

3番目の議題は教区司祭団会計の来年度予算案の審議。教区全体で経済状況が厳しさを増しているのを踏まえて話し合い、予算案は承認された。この後、各種の連絡報告があった。

板垣 勤 神父

各地区からのお便り

第5 地区より

< 東日本大震災支援チームの活動紹介 >

まもなく9回目の3.11を迎えようとしています。北仙台教会は大震災の3日目から信徒と近隣住民への「炊き出し」を行い、15日後から並行して「チャリティーカフェ」がスタートしました。このチャリティーカフェは、毎週、火曜日から土曜日の13:00～15:00まで開いています。場所は信徒館ロビーを使い、飲み物はコーヒー・紅茶・抹茶カフェ（お菓子付）などを用意しております。お代は募金箱を置き任意で入れていただいています。この募金は積み立てられて災害支援金として活用されています。利用される方は信徒が多いですが、教会入口の看板を見て通りすがりの方や近所の方が時折来られます。これが現在まで続き、開かれた教会とボランティア活動の礎になりました。



長く続いた仮設住宅訪問も復興住宅の完成で終了しましたが、復興行事へのコーヒーサービス等を継続してきました。その後、仙台・塩釜地域の8教会で「チームカリタス仙塩」を立ち上げ、カリタス石巻ベースや石巻ひびき仮設を訪問するようになり、現在も定期的に石巻ベース訪問をしています。

このように、私たち支援チームの活動は年々変化してきています。これは、被災された方々の生活の変化に寄り添うかゆえと考えます。宮城、岩手沿岸の復興状況とは裏腹に福島沿岸の被災者の方々はどうか？放射能問題が復興の足かせになっています。私たちに何かできることはないかと模索していたところ、亘理の修道会「マリア宣教者フランチスコ会」のシスターから声掛けがありました。カリタス南相馬に宿泊するボランティアのための夕食作りです。『これならできる!!』と引き受けました。昨年より月3回、3名体制で行っています。



私たちは、これまで直接的な支援ばかりを考えていましたが、このことにより“ボランティアのためのボランティア”という新しい形での支援活動を始めました。私たちは今、福島に関われたことをうれしく思っています。これは神様からのお恵みとしか考えられません。これからも神様の良い道具として活動を続けたいと思っています。

兄弟姉妹の皆さん、私たちのために祈りください。
福田 昌子（北仙台教会）

第8 地区より

< 福島刑務所訪問 — クリスマス^{しよっか}燭火礼拝 >

郡山教会の聖歌隊は、福島県内4教会の教誨師、信徒とともに昨年（2019年）の待降節に福島刑務所・刑務支所を訪問し、主の降誕を共に迎える時間を過ごしました。12月7日（土）に男性受刑者が収容されている福島刑務所、13日（金）には女性受刑者が収容されている福島刑務支所を訪問しました。

福島刑務所では礼拝参加を希望した50人ほどの入所者を前にして、祈りと聖書朗読が行われ、郡山教会の聖歌隊は、入所者と共に「きよしこの夜」「もろびとこぞりて」など11曲を歌いました。会場は訪問を喜んでくださっているような雰囲気でした。

福島刑務支所では200人ほどの入所者を前に、同じプログラムで礼拝がおこなわれました。ここは昨年、初めて訪問したときかなり緊張しましたが今回は、その時の張り詰めた空気は感じませんでした。それどころか、同行の牧師（プロテスタント教会と共催）の説教のユーモアに笑い声も聞こえました。



前回に比べ、なごやかな雰囲気の中で、入所中の女性たちと共に11曲歌いました。私たちが歌った「きかせてください」や「ハレルヤクリスマス」には、皆さんに喜ばれ熱心に耳をかたむけてくださっていましたのが心に残りました。

郡山教会聖歌隊

第7地区より

＜聖マルグリット・ブルジョア生誕400周年
おめでとうございます＞

Congregacion・ド・ノートルダム修道会
(CND)の創立者聖マルグリット・ブルジョアの
生誕400周年を記念するミサが1月12日(日)、
福島市の松木町教会で行われた。



ミサの前には聖マルグリット・ブルジョアの生涯を映像で振り返り、当時は観想修道会ばかりの中で「なすべき善があるなら、あるいはなすべき愛徳の業があるなら、どんな旅をもいとわず引き受けられた聖母のような女性」をCND会員のアイデンティティとし、外に出向いていく修道会(活動修道会)の最初の会のひとつとして誕生したことが紹介された。

ミサは主司式平賀徹夫司教、共同司式シャルル・エメ・ポルデュック神父により執り行われ、CND会員の方々と共に松木町教会、野田町教会の信徒、桜の聖母学院の卒業生など約200人が聖マルグリット・ブルジョアとその後のCNDの活動に感謝し、今後もCND修道会が福島の地でますます活躍されることを願って、ミサを捧げた。

渡邊 祐子(野田町教会)

教区の諸活動

第6回「いのち」勉強会

～ 福島原発事故を風化させない ～

講師：飛田 晋秀^{ひだ しんしゅう}(三春町在住カメラマン)

2020年1月13日(月・祝) 元寺小路教会1階ホール

主催：カトリック正義と平和仙台協議会 協力：地球を大事にする会

飛田さんが、2011年から撮りためた福島原発事故被災地の写真を見ながらの講演会に参加しました。

飛田さんが命を削って撮影された生々しい写真と、一つ一つ素朴に語る言葉は、深く、深く、私たちの心に突き刺さりました。現在、帰還困難区域が続々と帰還可能になり、放射線量も落ちたと言われていますが、飛田さんの話では、まだまだ線量が高い所が多く、そんな過酷な条件の中、現地で働く作業員・警備員・警察官などは、ほとんどマスクもつけず線量の詳しい説明も受けずに働いている場合が多いそ

うです。また、そもそもの帰還困難区域とそうでない所の線引きも実際に現地の線量を調査して決めたという訳ではなく、線量がほとんど変わらない場合も多いとのこと。

そうして、帰還困難区域の住民と道路ひとつへだてた区域外の人々には線量が変わらないにもかかわらず補償金の大きな差が生まれ、それが住民たちを分断する大きな原因になったとのこと。国は、被災地対策として、何十億もする町役場やさまざまな建物を建て、見せかけの復興を演出して帰還をなかば

強制するようなやり方をとっており、地元の町や村の自治体は国べったりとのことです。そんな中で、「あんたらは、高い補償金がもらえて、いいねえ」とやゆされ、被災者たちはだんだんと口をつぐんでいるという現実がある。一方で、何十億もかけて仮焼却炉を次々と造り、数年して廃棄してすぐまた近くに建設するという、大きな無駄遣い。現地の切実な思いがなかなか届かないもどかしさという感じがまっすぐと私たちの心に届きました。津波は天災ですが、原発事故は人災です。廃墟となった町並みと人が入れない区域の写真に被災した人々の苦悩が見えてくるのでした。

考えてみれば、安全管理を託されている原子力委員会の学者たちと経済界の人たちにとっては、「原子力政策」は国民をいかに説得し、真実は知らせない方が得策であり、恐怖を抱かせないようにするという国策だったのであらうと感じました。

憲法に保障されている「国民の知る権利」をもっとしっかり意識して社会環境を変えるため、政治家に意見を発信する若者をもっとたくさん養いたいものだと思つづく思いました。

どうすればよいのか、何が出来るのかの問題提起の集会となりました。会場の元寺小路教会の集会室

は、福島原発に心を痛めて何らかの活動をしている人たちで補助椅子を入れても満員でした。

Sr.相良 なるみ(聖ドミニコ女子修道会)



意味のあるクリスマスの集まり

「光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった」(ヨハネ福音書 1:5)

12月25日の夜、元寺小路教会の青年たち、そして I Sing for Joy (ISJ) 聖歌隊の仲間と共に、素晴らしいクリスマスをお過ごししました。国籍も年齢もさまざまな多くの人々が、イエスキリストの誕生を祝うために集まりました。

パーティーを始める前に、みなでお御堂へ行きお祈りしました。パウロ神父がお祈りの先唱をしてくださいました。一人一人が小さなキャンドルに火をともしお祈りしました。一人一人の心の中にキリストの光がともっているようで、とても美しい光景でした。

お祈りの後はクリスマスパーティーが始まります。国籍も年齢もさまざまな者同士が一緒になってごちそうを分け合い、話しをし、笑い合いました。そしてゲームを通して一緒に歌ったり踊ったりしました。それは喜びの時間でした。神様の慈しみによって、私たちは出会い、共に素晴らしい時間を過ごすことができているのだと感じました。



自分と異なる人々を受け入れ仲良くすることが平和への第一歩だということを、教会の仲間を通していつも気付かされています。この神様によってもたらされた多くの出会いに感謝します。

大野 萌二花(仙台教区 青年会 会長)

「野戦病院」としての教会を目指して

～大地震・大津波・原発事故の被災地より～

2月2日（日）午後1時30分より、北仙台教会信徒ホールにおいて、仙台ロゴス公開講演会が、幸田和生名誉司教を招いて開催されました。

まず、幸田司教が、現在、原町教会に住み、同じ敷地にあるカリタス南相馬の担当司教としてご自分が奉仕することになったいきさつから話し始められました。

東日本大震災が2011年3月11日に東北4県に、甚大な被害を及ぼしました。これは、仙台教区全域に及ぶもので、仙台教区だけの被害ではない、全教会として、支援していかなければならないことだ、ということが全司教たちで話し合われ、オールジャパン体制で助けていこうということに決まりました。



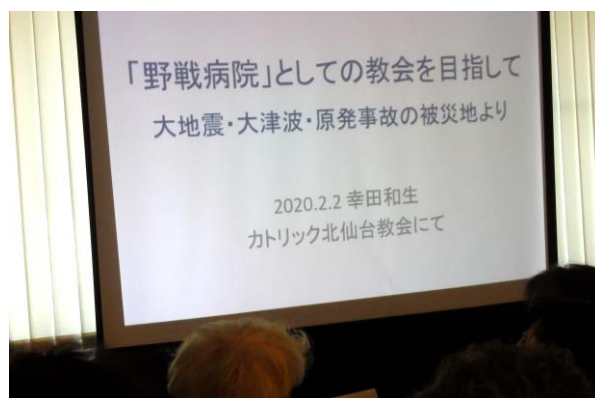
東京大司教区は、2011年の復活祭にカトリック東京ボランティアセンター（CTVC）を立ち上げ、その年の7月に担当司教として初めて原町教会を訪問しました。そのとき、お会いしたのは梅津明生神父でした。彼は地震で天井や壁が崩れていたのを直し、住めるように1人で一生懸命、きれいにしていっていらっしゃいました。私たち、東京から視察に行ったものは、福島地震、津波、原発事故の被害の現状を見て、どのような支援活動ができるのか、分かりませんでした。そこで、梅津神父にお尋ねいたしました。「ここで、私たちは何ができるでしょうか」と。神父様は「祈ってください。ここにきて、祈ってください」とおっしゃいました。

翌年、2012年6月に「カリタス原町ベース」を開設することができました。開設までには、「ここ南相馬で何ができるのか。また、逃げなければならないかもしれない。ここにベースを置いてよいのか」と真剣に悩みました。

しかし、2013年3月、マリアの宣教者フランシスコ会（FMM）が原町修道院を開設してくださいました。同じ年の9月に、聖心会と聖霊会が共同で三位一体修道院を開設。2015年に榎葉町の避難指示が解除

されるとすぐに、聖母訪問会榎葉修道院が開設されました。FMMはその後、原町修道院を閉め、亘理に開設された修道院と合併する形になり、現在も週1度、ボランティアのために、食事作りに北仙台教会のご婦人と一緒に奉仕に来てくださっています。ありがとうございます。

当初「カリタス原町ベース」は借家で、自分たちのベースがあれば、といつも考えていました。そこで、原町教会の敷地内にベースが建てられないものだろうか、ということをお平賀徹夫司教様にお問い合わせしたところ、ご快諾いただきました。こうして、2016年12月17日カリタス南相馬が落成し、同じ敷地内に原町教会、さゆり幼稚園とともに、カリタス南相馬があるという現在の形ができあがりました。



これまで、カリタス南相馬は、支援活動をすればするほど、原発事故の被害について一筋縄では解決も前進もできないということを体験してきました。訪日を考えておられたフランシスコ教皇に、ぜひ福島に来ていただきたいという思いでいろいろ交渉したのですが、日程の関係上、不可能でした。しかし教皇からの励ましを感じました。教皇は、「東日本大震災」を最初から「三重災害」とおっしゃっていました。東京での「東日本大震災の被災者との集い」に、被災者を300人参加させてくださいました。私は、最初から、福島に重点を置いて、被災者として信者でない人も連れて行きたいと思っていました。それは、私が、教皇の訪日したいという出発点は、被災者の苦しみを見ることだ

と感じていたからです。教皇は、原発の被害はまだ10年か20年後でも続いているかもしれない、また、再び原発事故が起こると、大災害になると見ておられます。「三重災害後の復興と再建の継続的な仕事においては、多くの手と多くの心をあたかも一つであるかのように、一致させなければなりません」と話されました。

教皇は、「イエスは目の前の人を癒された」ということを強調なさいます。本当に、教皇は、神と隣人を愛する人です。東京ドームでのミサにおいて、「教会は、野戦病院としての教会でなければなりません」と話されました。「傷のいやしと、和解とゆるしの道を、常に差し出す準備のある野戦病院のようであれ」と励ましてくださいましたが、これは、イエスがなさっていたことです。福音書を見ると、イエスがなさる病気の癒しと罪のゆるしが重なっているのが、分かります。



結論として、原町教会とカリタス南相馬のビジョン・ミッションについて申し上げたいと思います。

教皇フランシスコは、2013年に教皇に選出されました。その前年、教皇ベネディクト16世の時、「新しい福音宣教」というテーマでシノドスが開かれました。シノドスに出席した司教たちは、自分たちが話し合った実りをまとめました。その間、教皇ベネディクト16世が引退し、教皇フランシスコが教皇に選ばれました。シノドスの実りを使徒的勧告『福音の喜び』として出版されました。

その中で教皇は、「出向いて行く教会」の姿を打ち出されました。「出て行きましょう。すべての人にイエスのいのちを差し出すために出て行きましょう。わたしは、出て行ったことで事故に遭い、傷を負い、汚れた教会のほうが好きです。閉じこもり、自分の安全地帯にしがみつく気楽さゆえに病んだ教会よりも好きです」と、おっしゃっています。



「震災が起こった時、教会に助けを求めてくる人は1人もいませんでした。これではいけない。『地域とともに歩む教会』でありたいと痛切に感じ、約9年間、釜石でカリタスのベース活動が続けてきました」とカリタス釜石のベース長・伊瀬聖子さんが話されました。この言葉を忘れることができません。私たちは、この「地域とともに歩む教会」、つまり、「出向いていく教会」、「野戦病院としての教会」となることを目指してというビジョン・ミッションで救援・支援活動を続けていますし、これからも続けていきたいと思っています。

仙台ロゴス講演会は、仙台ロゴス研究所として、故佐藤千敬仙台司教が1971年に、北仙台教会に設置したもので、ロゴス（ことば）とディアロゴス（対話）を基本理念として、小教区を超えた活動を開始しました。休会の時期はあったものの、2013年から再会し、ドミニコ会司祭を指導司祭に、猪岡光氏を代表者として、定期的な活動の1つとして、講演会や研究会などを定期的に開いています。

Sr.長谷川 昌子（教区広報委員会）

雪中の殉教祭

2月23日（日・祝）、仙台市内広瀬川大橋河畔にて、「仙台キリシタン殉教祭」を行いました。司式は、仙台から離任が決まったロボ・フェリックス神父とフィラデルフィ・パウオール神父です。

当日は、雪、雨、の間に太陽が顔を出す不思議な天候となり、集まった70人ほどの信徒は、寒さに耐えながら、殉教者の熱い信仰と不屈の精神を思い起こしました。

当時を感じるのには十分な雪の中で、キリシタン殉教録が読み上げられると、心まで凍りつくように思います。



雪の広瀬川に向かい黙祷をささげ、マカバイ記の7人の息子の殉教が信仰の希望を語ります。ロボ・フェリックス神父の殉教者の尊い犠牲の上に日本の教会は建っているという言葉は、教皇様来日の感動を思い起こしました。

殉教者への献花と共同祈願は、元寺小路、一本杉、畠屋丁、八木山、東仙台、北仙台的各教会代表により

ささげられました。

担当教会のあいさつで、一本杉教会の久ケ澤 甫氏より、新型コロナウイルスの影響で開催が危ぶまれましたが、このように恵まれた殉教祭となり、参加者、スタッフに感謝の言葉がありました。

野田 和雄（八木山教会）

〈特集〉

被災地の今 4

＊ ＊ 南三陸より ＊ ＊

東日本大震災から約9年、震災当初から一緒に遊んできた子どもたちは、中学生や高校生になり敬語を覚え始め部活や勉強、遊びに励んでいます。仮設のお茶っこによく来られていたお婆さんのお孫さんは、震災の語り部となり、自身の体験や町への思いを訪れる人たちに伝えています。昨年12月、南三陸町は仮設住宅に住んでいる方は全員退去し、多くの方は高台へと引っ越し、復興住宅や自主再建されたついのすみかでの生活が始まりました。



最近、高台移転先の方へ個別訪問し、聞いた声の中で印象的な言葉がありました。いつも笑顔でお茶会の世話人をされていた方の声でした。「震災直後はボランティアさんに“ありがとう”ってとりあえず言ってきたけど、いつの間にかお茶っこに通っていたら知らない住民同士が仲良くなって今でも縁が続いていて、最近になってありがたいと思うね。遠くから来て精いっぱい笑顔で向かえ入れてくれるんだけど、こっちは大変なのに“何笑ってんのかな”って思ったりもしたけどさ」私はこの言葉がとてもストレートに心に入ってきました。時間が経った今だからこそ自然に出てきた言葉だったと思います。素人の私たちはただ無表情で座っている訳にもいかず、被災地の方たちの心を少しでも和らぐことができれば、と願ってはいるものの、悪気もなく心の傷に触れてしまっていた事があったのかもしれない。今まで「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ人への手紙 12：15）という箇所を簡

単に読んでいましたがこの言葉の深さを改めて気付かされました。

もう一つ、最近聞いた印象的な言葉があります。気仙沼の震災伝承館（旧向洋高校）へ高校生のボランティアさんたちを連れて行った時の事でした。すさまじい津波の映像を10分ぐらい見た後、一人の高校生は恐怖のあまり立ち上がり、涙が止まらなくなっていました。すると周りにいた気仙沼の方達が「私も津波で家が流されたの。泣いてくれてありがとね」と、とても優しい笑顔で声をかけてくれました。高校生は今まで見た笑顔で一番優しく辛そうに見えたとおっしゃっていました。伝承館の皆さんも被災された方たちばかりなのですが心配して高校生の側に近寄ってきてくれました。



私は震災から約9年、寄り添う事を願いながらも寄り添って貰っているという感覚がずっと続いています。今でも多くのボランティアさんは活動後、漁師さんに「ありがとうございました。お世話になりました」と言う方がほとんどです。漁師さんたちも「ありがとうございました。また来てくださいね」とおっしゃいます。そんなお互いに「ありがとう」と感じる瞬間の積み重ねが、多くの人に支えられながら約9年間続き、震災から10年の節目の年がやってきました。今までのご縁も新たな出会いも大切に、当たり前ではない日々感謝して過ごしていきたいと思います。

千葉 道生（カリタス南三陸）

司 祭 紹 介

マルコ・アントニオ・デ・ラ・ローサ・ルイズ・エスパーザ神父（グアダルペ宣教会）

(1)司祭になりたいと思った動機（きっかけ）はどのようなことですか？



宣教司祭になることについては、7歳ごろ母方のおじいさんから「あなたは日本人みたい」と言われて、その時から日本に行きたいと思い、どのようにして日本に行けばいい

のか、ずっと考えてきました。そして、宣教司祭になることが、ベストな方法だと考えたのです。6年生が終わるころ、私のカトリック学校にグアダルペ外国宣教会のホセ・アルバレス神父がやって来ました。宣教の召し出しについて、話してくれました。学校を終えてからメキシコのグアダハラ・シティにあるグアダルペ会の小神学校に入りました。それから、司祭になるまで、16年もかかりました。その間、ずうっと「日本に行きたい」という夢が続きました。そして、やっと1986年日本にやってきました。そして、まだ、日本にお邪魔しています。よろしくお願いいたします。

(2)司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか？

一番大切なことは、福音宣教です。しかし、ただ司祭の仕事をするだけでは、何かつまらない、物足りないと思います。宣教の活動について、いつもあらゆる方法を探しながら、今までやって来ました。どのように日本人の信者でない方に福音宣教すればいいのか、常に考えてきました。例えば、私は日本人のメンタリティーを理解することは、より深い祈りに開かれることだと信じます。そこで、禅を取り入れながらの祈りを約20年間、実践してきました。また、アントニオ・デ・メロ神父（イエズス会）が実践していた「サダナ」の祈りの方法もほぼ14年間、実践してきました。レクツィオ・デイピナ（聖書と祈り）は、最近始めたばかりです。また、お寺のお坊さんを訪ねて諸宗教対話をしたり、プロテスタントの牧師とカトリック教会の市民クリスマスのお話をしたり、エコロジーの問題の理解の深まりにつ

いての話・交流などを行っています。

(3)今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒へのよびかけ（希望）があれば、教えてください。

「深い祈りをしましょう」という呼びかけです。仙台教区の中には、祈りのグループが少ないです。特に深い祈りのグループが少ないです。短い黙想会（個人かグループ）やレクツィオ・デイピナ等々を増やすことができれば、よいと思います。日本人の心の深い所には、禅の強い影響があると思います。ですから、瞑想、観想的な祈りが出来ると思います。それを生かして、深い祈りをするようにしていただきたいです。そして、いつか外国人に教えたらよいなど期待しています。西洋人は、あまり瞑想ができないので。

(4)その他、神父を知るためのエピソードや、アピールなさりたいことなどなんでも。

フランシスコ教皇の呼びかけ「共に生きる地球家族」に対して、仙台教区、信者はどのように理解して、守っているでしょうか、具体的に知りたい、そして、力を入れたいと思います。聖霊の導きによってしましょう。

注：文中のアントニオ・デ・メロ神父（イエズス会）は、1931年インドムンバイ生まれの神父（故人）で、東洋と西洋の霊性の統合、心理学とイグナチオ的霊性の統合を試み、司牧的カウンセリング研究所「サダナ」を主宰した。（<https://sadhana.jp/a4.html>より引用）

俞 鍾 弼（ユ ジョン ピル）神父
（ドミニコ修道会）



(1)司祭になりたいと思った動機（きっかけ）はどのようなことですか？

赤ちゃんの時から、よく、司祭である叔父の教会や司祭館で遊んだりしながら、司祭になるのがあたりまえのように考えました。教会の人は、男子は、司祭、女子は、シスターになるべきだと思ったのです。それが、司祭になりたいと思った動機（きっかけ）となりました。

そして、特に、ドミニコ修道会のカリスマが、私

そして、特に、ドミニコ修道会のカリスマが、私

に合うと思って、入会しました。

(2) 司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか？

神学生るとき、司祭として大切なことは、伝統的に、聖徳(sanctitas)、学徳(scientia)、そして、健康(sanitas)であると学びました。今も、有効なことではないのかと思います。

そして、司祭として、判断力・分別力・識別力が、大切なことであると、学びました。個人的に、それが、司祭としてこれからも大切なことではないのかと思います。

(3) 今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒への呼びかけ（希望）があれば、教えてください。

信仰を深めながら、福音宣教のために、いっしょに、頑張りましょう。

メヒア・タデオ・ラファエル神父 (グアダルペ宣教会)



召命物語

私が、なぜ司祭になることを決心したのか明確な理由はあまりはっきりしてはおりませんでしたが、8歳

のときに司祭になりたいという思いがありました。私は祖母と一緒に毎日ミサに行っていました。ある日、ミサを捧げている司祭を見た時、私は、「私も

司祭になりたい」と考えました。その日以来、私はいまだに同じ願望と熱意を持っています。

仙台教区への貢献

司祭として、私は人々と一緒にいたい、彼らが居る場所で彼らに会い、彼らの居るところに私も居たい……。それが今のところ私がやろうとしていることです。私の叙階中に誰かがどんな司祭になりたいのかと、私に尋ねました。私は、聖パウロのローマ人への手紙を引用しました。「喜んで人と一緒に喜んでください。泣いている人と一緒に泣いてください。」私は人々の喜びと悲しみの中で一つになろうとしています。これが私の使命です！また、今日の社会の若者に手を差し伸べたいと思います。彼らは私たちの教会と社会の未来です。私は教会に来ている日本人と外国人の若者たちの両方をつなぐ方法と手段を考えています。

教区民への希望と願望

まず、私は教区民にメッセージを送り、クリスチャンであるという喜びと幸福を分かち合うことで希望を失わないようにしたいと思います。しかし、キリスト教信者として、福音の喜びをもたらす、他の人と分かち合うことは私たちの任務と使命です。私たちは、特に私たちが困っているとき、神がいつも私たちと共におられることを覚えておく必要があります。日本では、カトリック教会の信者は少数派ですが、神の国を築くためにイエスに従うという私たちの信仰と使命は、日本社会に対する私たちの最大の貢献です。全能の神が、私たちに希望と多くの幸せを持って人生を続ける恵みを、与えてくださいますように。

2020年度第1次 司祭人事異動

	氏名（敬称略）		所属	赴任地	前職・前任地
新任	トラン ナム フォン	Tran Nam Phong	神言修道会	第6地区担当	神言会本部
離任	フィラデルフィ パヴォール	FILADELFI Pavol	神言修道会	神言会本部	第6地区担当
離任	ロボ フェリックス	LOBO Felix	神言修道会	神言会本部	第6地区担当

編集後記

今回は、コロナウィルスの件などさまざまな想定外の出来事がありましたが、なんとかでき上りました。仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメールあてにお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com

次号発行予定日 8月2日（日） 原稿締め切り 5月末日